

高齢者デイサービスにおけるレクリエーション・プログラムについての事例研究

○廣田 治久（余暇問題研究所） 上野 幸（ 〃 ） 山崎 律子（ 〃 ）

キーワード：高齢者、デイサービス、レクリエーション・プログラム

1. はじめに

高齢化社会問題に対し、1994年には新ゴールドプラン、そして介護保険法の導入(2000年)など高齢者福祉策が進められている。新ゴールドプランでは、現状に対応した高齢者福祉を推進するため、その受け皿となる各種サービスの充実を図ることを目標としている。なかでも通所系サービスとして、デイサービス/デイケア施設は平成12年度には12,948カ所、平成16年には26,000カ所の設置を見込んでいる。

これらデイサービスにおいては、高齢者の生きがいづくりやQOLを高めることを期待されており、そのためのプログラムやサービスが展開されている。1998年に本学会大会において、デイサービスそのものが高齢者個人にとってのレクリエーションの機会であるとし、上野、山崎が全体のプログラミング、指導担当者のレクリエーション観、指導方法の概況を発表した(レジャー・レク研究39号 p120-123 1998)。その後高齢者福祉施策は介護保険法導入、施設の増加など高齢者福祉、高齢者デイサービスを取りまく環境が変化している。このような中で高齢者のレクリエーション活動の充実を進めていくためには現状を継続的に把握し、検証していくことが必要と考える。

2. 目 的

本研究は、高齢者デイサービスとレクリエーションの継続的研究として、レクリエーション・プログラムに着目し、

- ・デイサービスにおけるレクリエーション・プログラムの現状を把握する。
- ・今後の高齢者デイサービスのレクリエーション・プログラムの方向性、さらには今後の研究への示唆を得ることを目的とする。

3. 方 法

- ・対 象：都内4箇所のデイサービス施設。介護保険導入前後に設立されたそれぞれ2施設を抽出。事前に施設側に依頼し、了解を得られた施設に実施。
- ・調査内容：施設における1日のプログラムの流れと指導場面を観察。観察後、施設管理者、または主任に約1時間のインタビュー。
- ・調査日：2003年9月。

4. 結果および考察

< A 施設 >

設 立：1985年 定員数：25名 男女比： 3対7 ※調査当日コース比

施設形態：デイサービス、特養、ショートステイ

施設の特徴：4施設中最も歴史が古く、特養や病院に併設されている。火・金曜、月・木曜、水・土曜のそれぞれがリハビリを主に目的とした対象、痴呆や養護の必

要性の高い対象、虚弱高齢者が対象の3コースに分けられている。

プログラム：ネット手芸、テレビ鑑賞、塗り絵、トランプ、集団体操、集団ゲーム、カルタ、クイズ、散歩、誕生会、花見、新年会、忘年会、鍋パーティ

観察およびインタビューの結果：

- ・ 男性の利用者が率先して、他の利用者へのお手伝い(誘導)などを行っていた。
- ・ 午後の集団体操や集団ゲームは基本的に全員参加を促しているが、個人の体調や状態によっては無理に参加させていない。
- ・ 「工芸などのプログラムは失敗することも多いことから、完成しやすい、またはやり直しのきくものを行なっている。」
- ・ 「比較的活発な利用者の多いコースでは、マンネリ化が感じられ、新しいプログラムを提供したいと考えているが思うよう計画できていない。」
- ・ 「痴呆や養護の必要性の高いコースでは、あまりプログラムに急な変化を持たせると不穏な状態になることが多く、大きな変更はせず習慣性を大切にしている。」
- ・ 「年間行事は保険法導入以前は毎月実施していたが、予算や個人負担の問題もあり、費用をかけないで行なうか、実施数が減った。」
- ・ 「リハビリや機能回復に対し、利用者の関心は高い。」
- ◆ コースによっては利用者の混乱や不穏な状態を避ける意味でもプログラムなどに大きな変更をさける配慮がなされている。しかし、そのコースの中にも利用者の個人差があり、それらに合わせた内容の変化を考えているが思うように進んでいない。
- ◆ この施設では、リハビリ目的や利用者のADLや痴呆、養護の必要性などに曜日ごとのコース分けをしている。このことは多様な特徴の利用者の混在を避け、プログラム提供の均整化を図っているものと考えられる。
- ◆ 趣味活動ではあまり活動的でないように思われた男性利用者が、他の利用者の移動をお手伝いする場面が見られた。このような役割りを持ってもらうことなどが男性利用者への支援法の一つであると感じられた。
- ◆ 午後のプログラムの体操、ゲーム、ことわざ当ては、担当された職員の話術など利用者も大変楽しそうに参加されていた。しかし、個性豊かな指導であり担当者が変わっても同質なプログラムが行われているのか疑問に感じられた。

< B 施設 >

設立：1995年 定員数：40名 男女比：6対4

施設形態：デイサービス、リハビリテーション・ルーム

施設の特徴：理学療法、作業療法士の専門スタッフが多く、専門のリハビリ用設備を完備

プログラム：座位体操、リズム体操、自己紹介、集団ゲーム、ペーパークラフト、皮細工、籐細工、書道、陶芸、グループ体操、絵画、縫製、外出(日帰り)、散歩、茶会、買い物、音楽鑑賞、テーブルゲーム

観察およびインタビューの結果：

- ・ リハビリテーションや創作活動、集団ゲーム、グループ体操に利用者各人の選択によって参加されていた。
- ・ レクリエーションとして表記された午後の活動は、小グループでペーパークラフトであった。

- ・ 外出(日帰り)は利用者を小グループに分け、利用者の話し合いで計画を立てている。
- ・ 「リハビリテーションを目的に来る男性の利用者が多い。」
- ・ 「介護度や理解力を考えると全体一斉のプログラムを行なうことが難しい。」
- ・ 「宿泊のプログラムは制約が多くなかなか実施できない。」
- ・ 「施設設立からプログラムのパターン化・マニュアル化している。」
- ・ 「スタッフが変わっても一定の質を保つプログラムを実施したいが、マニュアル化しているためかえって利用者に合わせて変化をつけることなどが出来ないでいる。」
- ・ 「職員の技能アップが必要と感じているが思うように研修機会をもてない。」
- ・ 「リハビリに対する周囲のニーズが高く、今後リハビリを特徴としたい。」
- ◆ 利用者の興味や関心によってリハビリや体操、趣味・創作活動を選択できる柔軟なプログラムの構成がなされている。
- ◆ 反面、利用者それぞれが独自に活動を進めている状態であり、集団における人間関係や社会性の構築といった状況が見られない。さらには、1日、週間、月間、年間といったなかでのプログラムの関連性が乏しいと考える。

< C 施設 >

設 立：2001年 定員数：25名 全登録者数：87名 男女比：6対4

はっきりとした制限はしていないが、入所に対してはコミュニケーションが取れることを一応の条件にしている。

施設形態：デイサービス単独

施設の特徴：マージャンや囲碁、パソコンなど、とくに男性利用者を意識したプログラムの提供

プログラム：利用者挨拶、体操、クイズ、時事ニュース、マージャン、囲碁、将棋、オセロ、書道、ガーデニング、音楽療法、散歩、集団ゲーム、正月、花見、ひな祭り、忘年会、作品展示会、音楽鑑賞会、買い物

観察およびインタビューの結果：

- ・ 男性の利用者は自尊心やプライドが高く、人前で話すようなことも好きなことから朝の挨拶としてスピーチをしてもらっている。
- ・ マージャンや囲碁などやりたい人は、施設にきてほぼ終日行なっている人もいるなど、それぞれのプログラムは時間をあまり制限せずに柔軟に対応している。
- ・ この施設は会社をリタイアされた男性が中心となって設立されたこともあり、プログラムだけでなく、施設の内装や雰囲気も男性向けの落ち着いた雰囲気が感じられた。
- ・ 「プログラムは出来るだけ利用者を選択してもらう。」
- ・ 「入所前には本人だけでなく、家族からも趣味・嗜好、経験などを調査している。」
- ・ 「個別のプログラムを主として計画してきたが、集団ゲームなどにも楽しく参加してくれる参加者が増えたので入れるようにした。」
- ◆ マージャンや囲碁、パソコンだけでなく、花見や散歩もその日の天候などによってその場で希望をとるなど、全体の進行や安全に問題がない限り、利用者の自主性を尊重した柔軟な時間の捉え方がなされている。
- ◆ 朝の挨拶のなかで一人一人に簡単な挨拶からスピーチをお願いしている。こういった配慮も男性利用者にとって充実した活動内容につながっていると考える。

< D 施設 >

設 立：2002 年 定員数：40 名 男女比： 3 対 7

施設形態：デイサービス単独

施設の特徴：開設して 1 年が経過したばかりである。4 階建てのビルという施設の状況もあり、40 名定員の利用者を二つのフロアに分けている。

プログラム：レク体操、集団ゲーム、粘土細工、塗り絵、折り紙、ペーパークラフト、散歩、誕生会、花見会、音楽鑑賞、詩吟、敬老会

観察およびインタビューの結果：

- ・新しい施設ながら壁や天井には折り紙や紙のリボンなどが飾られている。他の施設を見学するときにもよく見受けられる光景だが、高齢者の生活する環境として適切かどうかについては疑問が残った。
- ・「二つのグループ分けは、利用者の A D L や理解力基準に分けている。」
- ・「A D L や理解力が低く、痴呆の方が含まれるフロアでは、午後帰宅を訴えたり、不穏な状態になる利用者が多いため、趣味活動でなく集団ゲームを行なっている。」
- ・「A D L や理解力の高い方には、他の利用者へのお手伝いをお願いすることがある。」
- ・「手工芸などで作る物は、年間の行事などと関連性を持たせるようにしている。」
- ・「自己負担は、材料費として 100 円いただいているが、これ以上の高額は言えない。」
- ・「毎回の集団ゲームは、計画書を書くか、前回使ったものを保存して使用している。」
- ◆ この施設は開設して一年を経過したばかりの施設であり、月 1 回の会議や主任の熱意などがとくに感じられた。
- ◆ 2 つのフロアに分かれてプログラムが進行されており、利用者の A D L や理解レベルによって対応していることや、グループに対応してプログラムの進行も変えるなど、プログラム支援に利用者に合わせて対応がなされている。

5. まとめ

今回のデイサービスにおける調査の結果をまとめると以下のようになる。

- ・男性増加、A D L や理解力の差など利用者の多様化が進んでおり、それら多様化に応じたプログラムの提供方法、利用者のグループ化を行なうなどの手段がとられている。
- ・レクリエーション・プログラムのパターン化・マニュアル化を図りたい意向が伺えたが、逆にプログラムのマンネリ化の問題も抱える現状にある。

しかし、今回の研究と先に行った研究で述べた「全体のプログラミング」「レクリエーション観」「指導方法」と合わせて考えれば、

- ・デイサービスでのレクリエーション観は、依然として曖昧、または狭義であり、レクリエーションに対する認識を高める啓蒙が必要である。
- ・プログラムの指導技術についても利用者の多様化が進む中、各施設において熱意ある様々な工夫がなれているものの、やはりプログラミングや介在技能においてその教育的施策が急務である。
- ・デイサービスにおけるレクリエーション・プログラムを、プログラム単独ということだけでなく、包括的な視点と専門的知識・技能を有する専門職の配置が必要である。

以上のような問題を改めて確認するに至った。